野文芸

季題 当季自由句

広野町 水無月句会

遠藤健太郎

吟行ののんどが乾く麦の秋高架道の橋脚映す植田かな 吾が肺の若葉の風に染まりけり

鯨岡 生

今宵また酒の肴の冷奴 園児等の声かけ放す小鮎かな いっせいに喉元そらす燕の子

晩酌を楽しみにして野びる採る 根本 山水

山桜風ぬくもりて散りはじむ 初蝶のあとゆっくりと歩みけり

阿部

真生

青芝やパークゴルフのにぎやかに渓谷の明るくなりぬ岩つつじ 妻と吾桜シャワーを浴びるたり

朝な夕な奥の山よりほととぎす 雨来ると見越して茄子の苗を植う 暮れ初めし山の端の空柿若葉

かんぽの穂先の染まる畦の道 田田

雨あがり孫とあそべるあめんぼう つばなの穂児の手にそっと触れており

野いちごの花くぐり来て水速し 五六基の山墓つつむさくらかな 花ざかり小学校は授業中 酒井

ひとり待つ町民バスや柿若葉水色の空に反転鯉のぼり 母の日や宅配で来るワンピース

広野みなづき短歌会六月詠草

(旧仮名使用 五十音順)

五月なか孫の誕生祝ひつつ素直に正しく 語るも楽し 年老いて吾が身案ずる事多く孫の行く末 猪狩ユリ子

デイケアの迎えの車待ちつつも思はず仰 きに淋しさひしひしと泌む 一人暮しは吾だけにあらずと思いどもと

「わが父は死にたりと思ふ」の手紙見ぬ娘 の思ひのかく切なるを 小澤 健次

ぐ真青なる空

師笑顔にさとす 待ち時間長きをかこつ老患者に若き看護

絶え間なく診察続くもにこやかに「その

山あひを走る車窓に映る景濃みどりさみ後いかが」と医師はやさしく

木村ミヨ子

つ無欲にくらす 一人暮しとなりて十五年み仏に香捧げつ

び立つさみどりたのし 菅原 泰郎吾が庭に自然に生える蕗わらび今年も伸 囲の緑に身も染まりつつ山路ゆく四

訃報届きて 月出でて仰ぐ今宵の淋しさよ親しき人の 降り止まぬ小庭に見つつ親しきかかたつ く若葉しずくす 梅雨の雨しとどに降れば公園に人影もな むりいくつひっそりと這ふ 田副

バスよりもみじの手を振る 新田 里子泣く孫も乗り超えられたる五月病園児の 飾る大輪の牡丹 女性の輪広くなされと言ふごとく壇上に

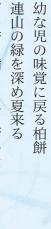
小房競ひ摘みゆく母の声する はさっそく葉書したたむ

山内

洋子 筍を早速煮しと電話あり亡母とも紛ふ叔 の虜となれる幼孫みどりの

> 沙汰心に詫びつつ 日偲び心に語る しみじみと滲む思ひに手を合はせありし 藤田 孝夫

合観の花の雫程なるしあわせと告げて別なりより涼風の立つ の枝垂桜の花枝地をする 山口 歌子モツアルトのアダジオ相応ふ寺庭に百年 歌ひし人の思ひ眩しむ 目に見ゆる幸福ならむ別れゆく後姿に祈 むる春の糠雨 穀雨とふ言葉知りたり夕まけて音なく浸 いかなることのありても不思議なき齢と してしばらくを置く ふさわしき花見当たらぬ大き壺水を満た みじみ言葉なく会ふ る友のしあわせ れぬ虚実いくばく 水引草は鹿の子絞りに群れ咲きてそのめ しあわせの形残れるアルバムの父母にし



西

Щ

子

筍の香に満たされる厨かな

鯨岡 正子

鼻唄でカッコーワルツキウリ漬けみどり色シャツ干しにけり五月晴 茶柱の立つよろこびよ柏餅